枕草子　郭公考（ほととぎす）

――諸本の本文からの考察――

磯山直子

一、各系統本における郭公描写

枕草子に姿をあらわす郭公は、清少納言の鍾愛の対象である。清少納言は、郭公の鳴き声を賛美し、時には郭公を探し求めて賀茂の奥まで出掛けて行く。これまで、枕草子の郭公はしばしば論じられてきたが、そのほとんどが三巻本による考察であるように思う。枕草子は、雑纂本である三巻本・能因本と、類纂本である堺本・前田家本の四系統に大別されるが、それらの本文を比べてみると、郭公の記述回数・記述内容には幾つかの差異が認められるのである。(注1)

私は、枕草子の写本には、清少納言の手を離れた後の長い享受段階があり、各系統内においても変容を遂げていったと考えるが、(注2)その途上で郭公はどのように享受者に受け止められていったのであろうか。本稿では、現存最古の写本である前田家本の編纂意識を中心に据えて考察したい。前田家本は、その成立が鎌倉中期を下らないとされる写本であり、その本文は、能因本系統本と堺本系統本を底本とする改修本である。改修されてはいるものの、そこに枕草子の成立間もない時期の本文の面影を伺い得る可能性もあると思うのである。このような見方をする時、前田家本の編纂作業そのものが、枕草子享受のひとつの姿であると言えよう。以下、前田家本を中心に、四系統内における郭公の記述から、枕草子写本の性格を考えてみたいと思う。

まず、枕草子中、郭公の語が記されている章段の数がいくつ存在するかを、四系統それぞれで数えてみると、前田家本で六章段、三巻本で八章段、堺本で五章段、能因本で七章段である。また、各系

統ともそれらの章段内において郭公の語が何度記述されているかを数えると、前田家本では合計十四回、三巻本では二十回、能因本では十八回、堺本では七回となっている。更に、章段ごとに見てみる。便宜上章段区分を三巻本で示すと、

《1》「正月一日は」の段（三巻本三段、前田家本二〇〇段、堺本一九〇段、能因本三段に相当）と、《2》「せちは」の段（三巻本三七段、前田家本三段、堺本一九三段、能因本四六段）では、各系統とも章段内における郭公の記述回数は一回である。また、《3》「賀茂へまゐる道に」の段（三巻本二一一段、能因本二四八段。前田家本と堺本は、現存本では該当章段を欠いている。）では、郭公の記述回数はそれぞれ三回と一致するのである。

一方、それ以外の章段では、各系統を比較して何らかの差異が存する。《4》「五月の御精進のほど」の段（三巻本九六段、前田家本三二八段、能因本一〇四段、堺本は該当章段ナシ）では、記述回数は各系統とも七回と同じだが、一部記述内容が相違する。

また、一章段内の記述回数が一致していない章段として、《5》「鳥は」の段（三巻本三九段、前田家本四八段、堺本一一段、能因本四八段）がある。当段では、三巻本が三回、能因本と堺本が二回、前田家本が一回。更に、《6》「見ものは」の段（三巻本二〇七段、前田家本七六段、堺本一九二段、能因本二〇三段）でも、ほととぎすの記述回数は、三巻本が三回、他の三本は二回となっている。さらに、《7》「木の花は」の段（三巻本三五段、前田家本四四段、堺本七段、能因本四四段）でも、三巻本と堺本が一回、前田家本と能因本が二回となっている。また、《8》「夜まさりするもの」の段（三巻本一本の一、前田家本一七六段、堺本一三八段、能因本は該当章段ナシ）では、三巻本一回。堺本と前田家本は、該当する章段はあるものの、三巻本と違って本文中に郭公の記述が存在しない。このように、郭公の語ひとつをとっても、枕草子の諸本には、異同が甚だしいのである。続いて、それらの内、特徴的な章段を考察したい。

二、前田家本の編纂意識

まず《1》「正月一日は」の段を見てみるが、この段は、章段の構成が各系統で混乱している。まとめると、郭公が登場する場面は、三巻本では、三段の中間部分「四月まつりの比いとおかし……」と、四月の情景を描く箇所である。能因本も三段に相当し、「正月一日は」で始まり、三巻本と同様の内容となっている。一方、前田家本を見ると、三巻本と能因本と同様の郭公の記述がみられるのは、「正月一日は」で始まる章段ではなく、「四月ころもがへいとおかし」で始まる二〇〇段である。堺本は、一九〇段に相当し、「四月

の衣がへいとをかし」で始まり、前田家本と同様といえる。章段区分が繁雑ではあるが、つまり前田家本二〇〇段と堺本一九一段は、三巻本三段と能因本三段の一部分に該当するということになるのである。

このように、ここでは章段区分を同じくする前田家本と堺本であるが、この二本は、三巻本と能因本が雑纂形態を持つのに対し、ともに類纂形態を持つ。しかし、その章段配列の順序はすべて一致しているわけではない。しかし、配列を同じくする章段群もいくつか存在している。ここもその例である。該当章段とその前後、前田家本一九九～二〇一段と、堺本一八九～一九一段は、配列順序が同一であることに留意しておきたい。

次に、四系統の本文を比較してみる。郭公は、写本により、「ほととぎす」「時鳥」とも表記されるが、それぞれ郭公の語の前後の文章を引用すると、

（前田家本）かすみもきりもへだてぬそらのけしきなどこそたゞなるともなくおかしけれ。すこしくもりたるゆふつかたなど、しのびわびたる郭公の、そらみゝかとおぼゆるまでほのかなるこゑをきゝつけたるは、まことにかぎりなくおかしくおぼゆ。（二〇〇段）

（堺本）かすみも霧もへだてぬそらのけしきなどこそたゞなにともなくをかしけれ。すこしくもりたる夕つかたより夜るなど、忍び侘たる郭公の、そらみゝとおぼゆるまでほのかなる声聞つけたるは、まことにかぎりなうをかし。（一九〇段）

（能因本）・霞もきりもへだてぬ空のけしきのなにとなくそゞろにおかしきに、すこしくもりたる夕つかたよるなど、しのびたる郭公のとをう空みゝかとおぼゆるまでたど〳〵しきをきゝつけたらん、なに心ちかはせん。（三段）

（三巻本）霞も霧もへだてぬ空のけしきのなにとなくすゞろにおかしきに、すこしくもりたる夕つかたよるなど、しのびたる郭公の、遠く空ねかとおぼゆばかりたど〳〵しきを聞つけたらんは、何心ちかせん。（三段）

これを見ると分かるように、各系統ごとの異同は多いが、波線部などからその本文を大別すると、三巻本と能因本が近似し、それに対立して、前田家本と堺本が近似した本文を持つという区分ができよう。このことと、先に述べたように前田家本と堺本章段が同一の配

列順序を持つことを考え合わせると、前田家本編者が、その編纂にあたって、まず堺本の章段区分を参考にしたことが分かる。前田家本が、能因本系統の本と堺本系統の本を底本として作られた改修本であることは、楠道隆氏によって提唱され、通説となっているが、前田家本編者は、手元にあった能因本系統と堺本系統それぞれを、自らの手で解体整理し、編集しなおしたのではなく、その編纂に際して、すでに類纂形態を持っていた堺本の章段の冒頭をまず手掛かりにしたことが、このことからも分かるのである。

さらに《1》と同じ前田家本の編纂意識がよく現れている例として、《7》「木の花は」の段がある。三巻本は三五段、前田家本は四四段、堺本は七段、能因本は四四段にあたる。この章段の冒頭部分を見ると、

（前田家本）木のはなは、むめ。まして、こうばいは、こきもうすきも、いとをかし。さくらのはなびらおほきに、花の色こきが、えだはほそく、はゝまれにさきたる。（四四段）

（堺本）木の花は、むめ。まして、紅梅は、うすきもこきもいとをかし。さくらは花びらおほきに、はの色いとこきが、枝ほそくて、かれはにさきたる。（七段）

（能因本）木の花は、梅のこくもうすくも紅梅。桜の花びらおほきに、いろよきが、枝はほそう、かれはれにさきたる。（四四段）

（三巻本）木の花は、こきもうすきもこうばい。桜ははなびらおほきに、葉の色こきが、枝ほそくて、咲たる。（三五段）

となる。前田家本と堺本には、字句が前後するなど多少異同はあるが、能因本・三巻本と比べると、より近似している本文を持つことは明らかである。しかし、このように前田家本は、冒頭部分では堺本と近似した本文を有しているのであるが、読み進んでいくと、堺本よりむしろ能因本との近似箇所が多くなってくるのである。郭公の記述でその様相を確認すると、前田家本においてまず郭公が登場するのは、「卯の花」について言及する箇所であるが、その記述は、

うの花は、しなおとりて、なにとなけれど、さくころのおかしう、郭公の、かげにかくるらんと思に、いとをかし。（四四段）

とさへおもへばにや、なをさらにいふべきにあらず。（四四段）

とある。

次に、他系統本を見ると、「卯の花」の項目自体が、堺本と三巻本には存在していないのである。よって、「卯の花」に付随して記される「郭公」の語も存しない。一方能因本は、

卯花は、しなをとりて、何となけれど、咲比のおかしう、郭公の、かげにかくるらんとおもふに、いとをかし。（四四段）

という本文を有する。前田家本の卯の花についての記述は、能因本の本文を参照して記されたことは間違いないであろう。

前田家本がその編纂時に、記述する項目をより増補する傾向にあったことは前稿で述べたが、[注4] ここでも、たとえ堺本に「卯の花」が記されていなくても、能因本にその記述があるのならば、当然前田家本編者は採用したであろう。それに伴い、郭公の存在も前田家本に取り入れられるのである。

つづいて、郭公が登場するのは、「橘」について記す箇所である。この部分、前田家本は、

はなのなかよりこがねのすゞかといみじうきはやかにみえたるなどは、あさつゆにぬれたるさくらにおとらず。郭公のよすがとあり、堺本は、

花の中よりみのこかねの玉とみえてはいみじうきはやかにみえたるなどは、春の朝ぼらけの桜にもおとらずぞおぼゆる。時鳥のよすがとさへおもへば、なをさらにいふべきにもあらず。（七段）

とある。一方、能因本は、

花の中よりこがねの玉かと見えていみじくきはやかにみえたるなどは、あさ露にぬれたる桜におとらず、郭公のよるとさへおもへばにや、猶さらにいふべきにもあらず。（四四段）

という本文を有する。当段の冒頭部分では堺本に近似した本文であったが、ここに見られるように「橘」に関する記述では、前田家本は堺本よりむしろ能因本に近い本文を採用しているのである。このことからも、前田家本の編者が、編纂に際して、まず堺本の章段区分を基準にし、その後能因本の本文を取り入れたことが分かるので

ある。前田家本編者は、「木の花は」という章段を、堺本を参照して冒頭部分から書き写すと同時に、能因本との校合をしたのであろう。

三、郭公描写の増幅

つづく、《5》「鳥は」の段（三巻本三九段、前田家本四八段、堺本一一段、能因本四八段）は、各系統とも鳥の名を列挙し、時には寸評を付しているが、列挙する鳥の名の項目数・順序などは、各系統で一致せず混乱している。まず、前田家本の章段冒頭を見ると、

とりは、かはちどり。ともまどはすらんこそ。かはのうへとをくきこえたる、ものあはれなり。かりのこゑは、はるかなる、いとあはれなり。ちかきは、わろき。かもは、はねのしもうちはらふらんとおもふにおかし。うぐひすは、よになくさまかたちもこゑもおかしきもの、夏秋のすゑまでおなじこゑになきたるとだいりの内にすまぬぞといとわろき。（中略）こと所なれど、おふむ、いと〳〵あはれなり。くひな。しぎ。（後略）

（四八段）

というように、「川千鳥」「雁」「鴨」「鶯」「おうむ」と続き、全部で二一種の鳥を挙げ、各々の鳥についてその特徴や好ましい点などを記述していくが、四項目めにその名が挙げられる鶯についての言及箇所で、郭公が登場する。しかし、すでに山脇毅氏が指摘されている通り[注5]、ここに記される郭公は、あくまで鶯が「よになくさまかたちもこゑもおかしきもの、夏秋のすゑまでおなじこゑになきたるとだいりの内にすまぬぞいとわろき。又、よるなかぬこそいぎたなくおぼゆれ。……」なのに対し、郭公は「あさましうまたれて、よるうちまちいでられたるこゝろばへこそいみじうめでたけれ。六月などには、まことにおともせぬが……」と、鶯についての記述の中で引き合いとして記されているのであって、郭公に主眼を置いた文章ではなく、郭公を独立した項目とみなすことはできない。一方、能因本と堺本を見ると、鶯（堺本は十六項目め、能因本は十二項目めに挙げる。）の引き合いとして郭公が書かれる点は同じである。しかし、堺本と能因本では、冒頭部分に前田家本には記されない郭公の語が存在するという違いがある。前田家本は先程の引用と重なるが、当段冒頭をそれぞれ引用すると、

（前田家本）　とりは、かはちどり。ともまどはすらんこそ。かはのうへとをくきこえたる、ものあはれなり。かりのこゑは、はるかなる、いとあはれなり。ちかきは、

わろき。かもは、はねのしもうちはらふらんとおもふにおかし。うぐひすは（中略）こと所なれど、あふむ、いとあはれなり。（後略）　（四八段）

（堺本）

鳥は、ほかのとりなれどあふむいとをかし。人のいふなる事をまねぶらんよ。郭公いとめでたし。くゐな。しぎ。宮こどり。ひは。（後略）　（一一段）

（能因本）

鳥は、こと所の物なれどあうむはいとあはれなり。郭公。くゐな。しぎ。みこどり。ひは。（後略）　（四八段）

となる。これを見て分かるように、堺本と能因本の二項目めに、前田家本には存在しない郭公の名が記される。この前田家本の状況について、山脇氏は、「『あふむ』の次にあるべき時鳥が無い。恐らく重出だと考へて、削ったのであらうか。前田家本編者のしさうなことである。」と述べられているが、[注6] 果たしてそうであろうか。先にも述べたように、前田家本は、編集に際して項目をより増やしていく傾向にある。前田家本の主底本である能因本、堺本ともに「あふむ」と「しぎ」の間に「郭公」が記されていたならば、前田家本編者が、郭公の項目を削除するだろうか。

無論、前田家本が参照した能因本・堺本系統の写本が、現存するものと同一であるとはいえない。前田家本が参照した写本には「あふむ」の次に「郭公」という項目は記されていなかった可能性も十分あるだろう。しかし、前田家本は編纂当時の面影をとどめ、能因本と堺本に存する二項目めの「郭公」は、前田家本との接触を離れた後に、後人によって増補されたと考えることもできよう。増補した人物は、当段では、郭公が鶯の引き合いに出されたにすぎず、項目として独立していないことに気づいた上で、その際やはり郭公を好ましく描いていることと、枕草子内に散見するその他の郭公賛美の文章――たとえば、清少納言が賀茂の奥まで探訪するほど郭公を好んでいたことなど――を考え合わせ、「郭公」の一語を書き加えたのではないだろうか。

次に、三巻本をみると、「鳥は」の段は三九段で、その冒頭は、

鳥は、こと所の物なれどあふむいとあはれ也。人のいふらん事をまねぶらん。郭公。くいな。鴨。都鳥。ひわ。……　（三九段）

とあり、能因本と堺本同様二項目めに「郭公」と記す点は同じである。また、鶯の引き合いとして郭公を描く箇所も存在するが、それ

は前田家本・能因本・堺本と同一ではなく、「祭りのかへさ」の情景を記す場面においてである。その記述も、

うり院、ちそくゐんなどのまへに車を立たれば、時鳥もしのばぬにやあらん。なくに、いとようまねびにせて、木だかき木どもの中にもろ声に鳴たるこそ、さすがにおかしけれ。（三九段）

と、他系統本とは異なっている。さらに三巻本では、当段末尾に、

郭公は、なをさらにいふべきかたもなし。いつしか、したりがほにも聞えこたに[仕7]、うの花はなたち花などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへ也。五月雨のみじか夜もねざめをして、いかで人よりさきにきかんとまたれて、夜ぶかくうち出たる声のらう〳〵じうあひ行づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたもなし。六月に成ぬれば、をともせずなりぬる、すべていふもをろか也。（三九段）

と、改めて郭公について述べている。まず、「六月に成ぬれば」以下の文章を見ると、これは、堺本と能因本には見られない三巻本のみに存する郭公の記述である。ここでは三巻本は、前田家本はもとより能因本・堺本とも成立を異にするようである。内容を見ると、まず前田家本・堺本・能因本において、鶯の引き合いとして記述された際の「六月などは、まことにおともせぬ」という郭公の記述と重なるところがある。また、この三巻本末尾に描かれる郭公は、「卯の花」「五月雨」などとともに鑑賞されているのであるが、この郭公観は、万葉集や古今集などの和歌に描かれる世界ときわめて類似する、夏期を代表する鳥である郭公についての共通意識としての色合いが濃いのである。ここで、例として、古今和歌集の巻第三・夏歌から引用する。

（題しらず）　（よみ人知らず）

一四一　今朝来鳴きいまだ旅なる郭公花橘に宿は借らなん

寛平の御時の后の宮の歌会の歌　紀友則

一五三　五月雨に物思ひをれば時鳥夜深く鳴きていづち行くらん

（寛平の御時の后の宮の歌合の歌）　貫之

一五六　夏の夜の臥すかとすれば郭公鳴く一声に明くるしののめ

郭公の鳴くを聞きてよめる　貫之

一六〇　五月雨の空もとどろに郭公何をうしとか夜ただ鳴くらん

郭公の鳴きけるを聞きてよめる　　躬恒

一六四　ほととぎす我とはなしに卯の花の憂き世の中に鳴き渡るらん

このように、三巻本は、和歌の題材性を織り込む形で記述され、同様の文章が存しない他系統本と比較する時、三巻本に郭公賛美の傾向がより強いことは明白であろう。しかし、それゆえ三巻本が枕草子の原形に近い形をとどめているとは言えまい。現在枕草子は三巻本を中心にして読まれることが多いが、清少納言の郭公賛美の度合いには、他系統本と比較する時には微妙な相違が生じるのである。他系統本には描かれない三巻本末尾の郭公の存在をどう位置付ければいいのであろうか。先に、堺本と能因本の二項目めに記された「郭公」を、後人の増補と考えたが、ここでも、三巻本が長い時代に渡って享受される中で、郭公賛美の表現が、より増幅していった可能性を指摘したい。鎌倉中期頃に編纂された前田家本と、その主底本になった堺本と能因本には存在せず、室町中期書写の三巻本の写本に存在する郭公の描写からは、三巻本が、清少納言の手を離れたあとも、加筆増補などを繰り返し、享受者を巻き込む形で彩られ、形づくられていったと考えられるのである。

続いて、《4》「五月の御精進のほど」の段を考えたい。この段は、清少納言の郭公探訪の段である。長徳四年五月、定子が職にいらっしゃったころ、清少納言は女房たちと賀茂の奥に郭公の声を聞きに行くことになる。当段では、その道中の様子から、職に帰った後の定子とのやり取りを書きとどめている。現存堺本には当段が存しないので、前田家本・能因本・三巻本を比較すると、当段における郭公の記述には、いくつかの異同がみられるのである。その中でも、最も重要であると考えられる箇所は、職に帰還後、定子が清少納言を含む女房たちに郭公の和歌を所望されたる場面である。まず、藤侍従が歌を詠む。三本を引用すると、

（前田家本）　とう侍従、ありつるうのはなにつけて、うのはなのうすやうにかきたり。
ほと、ぎすなくねたづねにきみゆくとしらばこゝろをそへもしてまし　（三二八段）

（能因本）　藤侍従の、ありつる卯花に付けて、卯花のうすやうに、
郭公なく音たづねにきみ行ときかば心をそへもしてま

し　（一〇四段）

（三巻本）　頭侍従[注8]、ありつる花に付けて、卯花のうすやうにかきたり。此歌おぼえず。　（九六段）

前田家本と能因本では、「ほととぎすなくねたづねにきみゆくとしらばこころをそへもしてまし」という、藤侍従が詠んだとする和歌が記されているのに対し、三巻本では、「此歌おぼえず。」と、和歌がまったく記されていないのである。ここでも、三巻本が、前田家本とその元になった能因本とは、成立を異にしていることがいえよう。

前田家本編者はその編纂に際し、手元にあった写本に記されている藤侍従の和歌を写したのであろう。堺本系統については、この段が現存しないため、前田家本編纂時にどのような状況であったか不明だが、すくなくとも、前田家本が編纂・書写された、鎌倉中期またはそれ以前の段階ですでにこの和歌が写本に記されていたことは確かである。ここで、清少納言自身が記した枕草子原形本文がどのようなものであったかを考えるならば、やはり三巻本の「此歌おぼえず」が、その原形であったと考えるのが一番自然であろう。定子に求められ藤侍従が和歌を詠んだ。しかし、清少納言は、当段を執筆するにあたって、いったいどういう和歌であったのか記憶していなかったのであろう。当段には様々な場面が描かれるのであるが、清少納言が記録し、強調したかったのは、定子と藤侍従とのやりとりより後に行われた、定子と清少納言自らの応酬であろう。その場面を引用すると、

かみのちりたるに、

「したわらびこそ恋しかりけれ」

とかゝせ給て、「もといへ」と、おほせらるゝるも、をかし。

「ほとゝぎすたづねていりしこゑよりも」

とかきて、まいらせたれば、「いみじう、けたまはりたりや。かうまでだにいかで、ほとゝぎすのことをかけつらん」と、わらはせ給も、はづかし。　（三二八段）

とあり、清少納言が定子を笑いに導くやりとりとなっている。そしてこの後、話題は清少納言の詠歌御免に移るのであるが、ともかく、藤侍従の和歌は、この段の執筆目的からして、清少納言にとってさして重要であったとはいえず、じじつ覚えていなかったので「おぼえず」と記し、それ以上追究する問題ではなかったのであろう。それではなぜ、能因本においてはこの和歌が記されるのであろうか。この問題も先程《5》「鳥は」の段で確認したように、享受者の存在がそこに深く関わっていると考えたい。清少納言が何気なく記し

た「おぼえず」という言葉だが、枕草子の熱心な読み手つまり享受者は、当然この和歌について興味を覚えたであろう。かえって「おぼえず」という言葉がその興味を触発したといえよう。存在はしたが記憶されていない和歌を能因本は新たに書き加えたのであろう。それでは能因本に記される藤侍従の和歌は、当日実際に詠まれた和歌であったのかどうかであるが、藤侍従の和歌を記憶していた人物は、本人も含め多数存在したのではないだろうか。清少納言が著した原形枕草子の最初の享受者は、まずは、清少納言周辺の人々であったはずである。和歌を知っていた人物が和歌を書き加え、それが能因本系統として伝播していったと考えられよう。そして、前田家本にも、能因本系統を参照した際に郭公の和歌が記されるのである。能因本が詠み継がれる長い歴史の中で、この和歌は藤侍従の和歌として鑑賞されるようになったであろう。前田家本編者もその一人である。前田家本は不純な本文を有するという見解も多いが、前田家本の編纂作業もまた枕草子享受の一様相であると思う。本文の優劣を越えて、ここには、写本に息づく枕草子鑑賞の生の姿が見られるのである。

注記

（注1）・前田家本の本文は、尊経閣叢刊丁卯歳刊行の複製本に拠る。なお、適宜、田中重太郎氏『前田家本枕冊子新註』（古典文庫、昭和四十六年）を参照した。章段は、『前田家本枕冊子新註』に従った。

・能因本の本文・章段は、田中重太郎氏『校本枕冊子』（古典文庫、昭和二十八年）に拠った。

・堺本の本文・章段は、林和比古氏『堺本枕草子本文集成』（私家版、昭和六十三年）に拠った。なお、適宜、田中重太郎氏『堺本枕冊子』（古典文庫、昭和二十三年）を参照した。

・三巻本の本文・章段は、杉山重行氏『三巻本枕草子本文集成』（笠間書院、平成十一年）に拠った。

◇各系統とも本文を引用する場合、仮名遣い等は底本のままとしたが、漢字はすべて通行の新字体に統一した。また、読解の便をはかるため、句読点を施し、濁音表記を付した。

（注2）前稿「枕草子本文の写本性」（片桐洋一先生古稀記念論文集『王朝文学の本質と変容』和泉書院刊）においては、前田家本「春はあけぼの」の冊を中心に他系統本との比較を試み、類聚章段における掲出項目の異同を考察した。その結果、前田家本の編纂に際しては、誤写の多さと、校訂意識の薄さ、更に項目の増補の三点を指摘でき、堺

本と能因本についても、写本が書写・享受されるにつれ、項目が増補される傾向があることを述べた。

（注3）楠道隆氏『枕草子異本研究』（昭和四十五年・笠間書院）六頁参照。「前田家本が呈する諸現象を総合した結果次の仮説が成立する。」として、「前田家本は伝能因本と堺本底本として集成して作られた後人による改修本である。」と記されている。

（注4）注2参照。

（注5）山脇毅氏『枕草子本文整理札記』二〇〇～二〇八頁参照。

（注6）注5に同じ。

（注7）陽明文庫本は「聞えこたに」という本文を有するが、三巻本内にも異同がある。「聞えこたに」（刈谷市中央図書館本）、「聞えたるに」（内閣文庫本）、「聞えうたに」（前田家本）。

（注8）三巻本の諸本の内、「頭」と表記するのは陽明文庫本のみであり、他本のほとんどは平仮名で「とう」と表記し、古梓堂文庫本が「藤」の字を当てる。

（いそやま　なおこ／本学大学院生）